OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	ブルゴスの「誕生」をめぐる諸問題
Author(s)	大内, 一
Citation	Estudios Hispánicos. 2005, 29, p. 87-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97965
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ブルゴスの「誕生」をめぐる諸問題

大　内　　一

ブルゴス市は、中世後期の史料のなかで *Caput Castellae* や *Camara Regis* と称され、13-15世紀にかけてカスティーリャ王国の政治、経済の中心としての機能を果たした重要な都市であることは周知のとおりである。しかし、その地位は、建設以降ブルゴス市が経験してきた絶え間ない戦い、イスラム教徒との戦いのみならず時にはキリスト教徒との戦いの歴史のなかで獲得されたものである。

ブルゴス市は、アストゥリアス国王ラミロ１世（在位842-50年）もしくはオルドーニョ１世（在位850-66年）が開始したドゥエロ川流域の公的再植民の過程のなかで、同王国の防衛を担う王国東部地域、イスラム教徒が *al-Qila*[*1] と称した地域における防衛拠点の１つとして９世紀後半に誕生した。その後、カスティーリャ伯領域の中心地として政治・軍事的重要性を増し、960年に伯位の世襲化に成功したフェルナン・ゴンサレスの下でカスティーリャ独立伯領の都となった。1029年にカスティーリャ伯となったフェルナンド１世（伯在位1029-35年）は、1035年、父であるナバラ王サンチョ３世大王（在位1000-35年）の死に際してカスティーリャ王を名乗り、ブルゴスもそれに応じて独立伯領の都から王国の都へと変貌した。しかし、フェルナンド１世（在位1035/37-65年）が1037年にタマロンの戦いでレオン王ベルムード３世（在位1028-37年）を破ってレオン・カスティーリャ王となったことにより、ブルゴスは王国の第一の都の座をレオンに奪われた。その後、1157年のレオン・カスティーリャ王アルフォンソ７世（在位1126-57年）の死に際して王国がレオンとカスティーリャに再び分裂すると、ブルゴスは、1230年のフェルナンド３世（在位1217/30-52年）によるカスティーリャとレオンの恒久統合までの間、カスティーリャ王国の都としてその政治的、軍事的重要性をさらに増大させたのであった。

中世・近世初期のブルゴス市に関して、少数支配者層の成立と王権との関係、国際商業活動と同市の発展との関係、海外におけるブルゴス商人などをテーマに研究してきた筆者にとって、あらためてブルゴス市の歴史を

全体的に見渡そうと考えるいま、ブルゴス市の「誕生」に関するテーマは、避けて通れないものである。本稿は、ブルゴスの建設年、ブルゴス地域の「無人化」、ブルゴスの名称の由来といったブルゴス市の「誕生」に関するトピックを研究史に触れながら簡潔に紹介するものである。

もっとも、ブルゴス市が誕生した当時のイベリア半島西部のキリスト教徒世界の諸事実を今に伝える史料（編年史や年代記、伝記、回想記録と言った文献史料および法文書や王令等の歴史を描く意図をもたない文書史料）の数自体、けっして多いとは言えず、9世紀後半のブルゴス市の「誕生」もしくは存在に直接あるいは間接的に言及する史料はなおさら少ない。上記テーマに関する研究には史料上の限界があることをことわっておきたい[*2]。

1．ブルゴスの建設年について

ブルゴスの建設に言及した主な史料として、『カスティーリャ年代記 I, II』、『セラート年代記』、『ブルゴス年代記』、『コンポステラ年代記』および『ナヘラ年代記』が挙げられる。これらの史料の共通点は、ブルゴスの建設が伯爵ディエゴ・ロドリゲスの手によること、ウビエルナと同時期に建設されたこと、アストゥリアス国王アルフォンソ3世の命令によることの3点である。しかし、建設年には異同が見られ、『カスティーリャ年代記 I, II』にはイスパニア歴[*3]DCCCCXX年、すなわち西暦882年[*4]；『セラート年代記』にはDCCCCXII年（874年）[*5]；『ブルゴス年代記』、『コンポステラ年代記』および『ナヘラ年代記』にはDCCCCXXII年（884年）[*6]と記述されている。これらのうち、『セラート年代記』に記された874年という建設年は、同年代記以外にブルゴスの建設年を874年とする年代記が確認できないことや、同年代記自体が前述した他の年代記より信頼性が低いと考えられていることから[*7]、『カスティーリャ年代記 I, II』の882年および『ブルゴス年代記』、『コンポステラ年代記』および『ナヘラ年代記』の884年と比較して真の建設年である可能性は低い。また、古文書学の観点からは、DCCCCXX（882年）およびDCCCCXII（874年）がDCCCCXXII（884年）を書写する際に生じた誤謬の産物である可能性が指摘されている。すなわち、DCCCCXXIIからXが欠落すればDCCCCXII（874年）、IIが欠落すればDCCCCXX（882年）となるからである[*8]。逆にDCCCCXX（882年）がDCCCCXXII（884年）もしくはDCCCCXII（874年）がDCCCCXXII

(884年) と記されたと考えるのは、それぞれIIもしくはXを新たに書き加えるという労力を必要とする行為を誤謬と見なさなければならず、不自然で説得力に欠けると思われる。

しかしながら、ブルゴスの建設年を上記の年代記の記述に頼って安易に特定することは危険である。建設年の特定作業は、少なくとも、880年代のカスティーリャ地域の政治・軍事状況に照らして行うことが必要である。なかでも、882年および883年のイスラム教徒による遠征は、とりわけ重要な政治・軍事的出来事であり看過することはできない。

『アルベルダ年代記』によると、コルドバのアミール、ムハンマド1世は、882年、二人の反乱者イスマイル・ベン・ムーサとフォルトゥン・ベン・ムーサがそれぞれ支配するサラゴサとトゥデラに向けて、王子ムンジルとハシム・ベン・アブド・アル・アジーズを指揮官とする遠征軍を派遣した。しかし、この遠征は成功せず、イスラム軍は矛先を変えてアストゥリアス王国に侵入した。まずアラバ伯ベラ・ヒメネスが防衛するセリョリゴを攻撃したが失敗し、その後、カスティーリャ伯ディエゴ・ロドリゲスが立てこもるパンコルボを包囲したがこれにも失敗した。そこで遠征軍はあらためてレオン攻撃に向かい、その途中、カストロヘリスを襲撃した。伯爵ムニョ・ニュニェスは、この攻撃により、建設中のカストロヘリスの城塞を放棄してアマヤに避難せざるを得なかった。ムハンマド1世は、翌883年にもアストゥリアス王国に対して同様の遠征を行った。遠征軍は、前年同様セリョリゴでベラ・ヒメネス、パンコルボでディエゴ・ロドリゲスに敗北し、ムニョ・ニュニェスが城塞化を十分に進めていたカストロヘリスには攻撃すらしかけなかった[*9]。その後、遠征軍はレオン近郊にまで迫ったが、アルフォンソ3世は、883年の年末もしくは884年1月初旬、トレドの司祭ドゥルシディオの働きによりムハンマド1世と10年間の休戦協定を結ぶことに成功した[*10]。

この2度の遠征で、イスラム教徒はパンコルボからカストロヘリスに向かう際、ローマ時代にヒスパニアとアキタニアを結んでいた第34アントニウス街道を通ったと思われる（地図参照）[*11]。この街道は、現在のブルゴス市の間近を走っており、もし882年にブルゴスの城塞が建設されていたのであれば、いずれかの遠征に際してイスラム教徒による何らかの軍事行動の対象になっていたと考えられる。しかし、この遠征に関する記述のなかにブルゴスやウビエルナへの言及がないと言う事実は、882年にブルゴ

スおよびウビエルナに城塞が存在した可能性が低いことを意味する[*12]。一方、遅くとも884年1月初旬にムハンマド1世との間に10年間の休戦協定を結んだアルフォンソ3世が、この機に乗じてドゥエロ川以北のメセタ地域の防衛と再植民の進展を直ちに企図した可能性は、戦略的観点からも高いと考えられる。このような防衛戦略の一環として、884年、王命を受けた伯爵ディエゴ・ロドリゲスがブルゴスとウビエルナに城塞を建設したと考えることに矛盾はない。

2．ブルゴス地域の「無人化」について

ブルゴスの建設年に関する議論は、必ずしも同市が建設された場所が無人であったことを前提とするものではない。なぜなら、公的再植民が、無人の土地に対してのみ行われたとはかぎらず、さらなる住民を誘致するために既存の集落に対して行われた可能性も否定できないからである。この点に関して、メネンデス・ピダルは、多くの史料に見られる *populavit* という語は「(人のいない場所に) 植民する」という意味だけでなく、「(孤立した集落を管轄下に組み入れながら) 新たな政治・行政組織を創る」という意味をもつと考えている[*13]。いずれにせよ、当時のブルゴス地域が無人地帯であったか否かについてはあらためて検証しなければならないが、その前に、ブルゴス地域を含むドゥエロ川流域の「無人化」に関する主な先行研究を簡潔に紹介しておく必要があろう。

ドゥエロ川流域の「無人化」および再植民は、中世前期のカスティーリャ史を研究する歴史家にとって重要な議論のテーマである。同地域が事実上「無人化」したことは多くの研究者が認めるところである。モクソーは、その原因として、①713年のムーサの遠征による荒廃と住民のガリシアおよび北部山岳地域への移動；②740-741年の半島におけるベルベル人の反乱に際したイスラム教徒による北部メセタ地域の放棄；③751年の遠征に際するアルフォンソ1世による住民の北部山岳地域への半強制的移住；④748-753年の干ばつと飢饉および714年と748年の疫病の流行を指摘している[*14]。

しかしながら、「無人化」をめぐる議論の論点は、その原因ではなく程度に関するものあり、その見解は2つに大別できる。すなわち、ドゥエロ川流域の「完全なる無人化」を主張する立場と「残滓的集落（村落の残滓とも言える人の営み）の分散的存続」を主張する立場である。前者の立場

に立つ主な研究者としては、サンチェス・アルボルノス、ペレス・デ・ウルベルおよびモクソーの名が挙げられる。サンチェス・アルボルノスは、「無人化」の根拠として、9-10世紀にかけて行われた再植民活動に関する数多くの文書史料のなかの「無人化」を示す語句や表現の存在を指摘するとともに、再植民の形態が「無主地の占有（プレスーラ）」であった事実を強調している。さらに、地名学の観点から、新たな入植地の名称と西ゴート時代の地名との間の齟齬の存在（地名の不連続）を指摘している[*15]。また、ペレス・デ・ウルベルは、アルフォンソ１世が戦略的理由によりドゥエロ川流域に「無人地帯」を創出したと主張するとともに、イスラム教徒の攻撃のなかで実行された初期の再植民活動を称揚している[*16]。しかしながら、モクソーは、サンチェス・アルボルノスの見解を基本的に支持しながらも、広大なドゥエロ川流域をポルトガル北部、レオン地域、原初カスティーリャ[*17]およびドゥエロ川以南[*18]の４つの地域に区分し、「無人化」の程度に地域差があることを認めている[*19]。他方、「完全なる無人化」を否定する研究者としては、ラインハルト、メネンデス・ピダル、オリベル・アシンの名が挙げられる。ラインハルトは、原初カスティーリャに関して、人名、法、叙事詩などの西ゴート的要素の存続を理由に同地域の「無人化」を否定すると同時に、アストゥリアスおよびカンタブリア地域の低い人口収容力を考慮して、アルフォンソ１世の遠征に際して生じた北部山岳地域への住人移動の規模を過大評価することなく、同地域の「無人化」を限定的なものであったと主張した[*20]。メネンデス・ピダルは、『アルベルダ年代記』のなかのアルフォンソ１世の遠征およびオルドーニョ１世とアルフォンソ３世の再植民活動に関する記述に誇張があると考えるとともに、公的再植民がさらなる住民を誘致するために既存の集落に対して行われたことを示して、史料に現れる populavit に「孤立した集落を管轄下に組み入れながら新たな政治・行政組織を創設する」の意味をもたせている。さらに、759年のサン・ミゲル・デ・ペドロソの建設文書から、公的再植民が始まる以前から原初カスティーリャに集落が存在したと主張し、同地域の「完全なる無人化」を否定している[*21]。また、オリベル・アシンは、原初カスティーリャにおけるベルベル人の集落の存在を地名学の観点から指摘し、彼らがイスラムの支配から逃れて渡来したアフリカ・ラテン語を話すキリスト教徒であった可能性を示唆している[*22]。

では、ブルゴス地域の「無人化」の実態はどのようなものであったのだ

ろうか。サン・ミゲル・デ・ペドロソの例を除いて、現時点では、「無人化」が生じたとされる8世紀半ばから公的再植民が始まる9世紀半ばまでの間に、ブルゴス地域に何らかの都市や集落が存在したとする実証的な研究は見られない。また中世考古学の観点からの精緻な研究成果も得られていない。ドゥエロ川流域の「無人化」に関する前述の諸説との関連では、ブルゴス地域の再植民の形態が「無主地の占有」であったという点で、サンチェス・アルボルノスの見解だけが有効と言える状況にある。しかしながら、地名学の観点からは、ブリビエスカとササモンが、ローマおよび西ゴート時代の名称（それぞれビロベスカとセギサモネ）を辛うじて保持していることが確認されている[*23]。もっとも、再入植者がゴート時代の地名を新たな入植地に命名する場合もあり、地名の連続性が村落存在の連続性を必ずしも保証するものではないことは言うまでもない。現在の研究状況では、ブルゴス地域が「完全なる無人化」か「残滓的集落の分散的存続」のいずれの状況下にあったかの結論を出すのは非常に困難である。

しかしながら、イスラム教徒がリオハ地方を支配した8世紀半ばから10世紀初頭の間、ブルゴス地域が、カラオラ、ビゲラ、ナヘラなどのイスラム教徒の城塞都市から比較的近くに、とりわけナヘラから騎馬で1日歩兵で2日の距離に位置し、奴隷にするための捕虜と家畜の獲得を主な目的としたイスラム教徒の略奪遠征に容易に晒される極めて危険な地域であったという歴史的状況を考慮すると、誰の保護下にもない「残滓的集落」が公的再植民が始まるまでのほぼ1世紀間を無事に存続し得た可能性は非常に低いと考えるべきであろう。

3．884年以前のブルゴスについて

これまでは、キリスト教徒の残した史料およびそれに依拠した研究成果を中心にブルゴスの建設年とブルゴス地域の「無人化」について述べてきた。しかし、884年の城塞建設時のブルゴスの地に、「残滓的集落」が存在していたか否かに関する疑問に答えてはいない。

884年以前のブルゴスの存在に関する議論は、イスラム教徒の残した史料、イブン・イザーリーが編纂した有名な『バヤーンの書』[*24]が発端となった。1862年に同書をカスティーリャ語に翻訳したフェルナンデス・ゴンサレスが、イスラム歴251年（865年）のイスラム教徒の遠征に関する記述のなかの「*Burgia* の領主グンディサルボ」に着目し、*Burgia* がブルゴスであ

ると述べたのである[*25]。これに対して、1901年に『バヤーンの書』をフランス語に翻訳したファニャンは、*Burgia* をブルゴスではなくアラゴンのボルハであると主張した[*26]。その後、ペレス・デ・ウルベルは、1945年に出版した『カスティーリャ伯領の歴史』のなかで865年のイスラム教徒の遠征に言及し、「…*Bordia* の領主グンディサルボ、*Bordia* はおそらくブルゴス、…」と述べ、884年以前にブルゴスが存在した可能性を認めた[*27]。さらに、1948年、サンチェス・アルボルノスもまた、865年の遠征を「モルクエラ峠の戦い」と命名するとともに、*Bordjia o Bordia* がブルゴスであるとのフェルナンデス・ゴンサレスの見解を是として紹介した[*28]。それに対し、レビ・プロヴェンサルは1957年、『バヤーンの書』に依拠して865年の遠征に言及しつつも、*Bordjia* をブルゴスと同一視することはなく、ブルゴスは882年もしくは884年に建設されたとの見解を示した[*29]。さらに、1969年、ペレス・デ・ウルベルも、『カスティーリャ伯領の歴史』の改訂版を出版し、865年の遠征に関する記述のなかで「…*Bordjia*、正確には *Bryycia* すなわちブリシア領主グンディサルボ、…」と記して前説を改め、ブルゴスおよびウビエルナの建設に言及して、ブルゴスの城塞は884年に建設されたとの見解を新たに示した[*30]。もっとも、サンチェス・アルボルノスは、その後も晩年に至るまで *Bordjia* がブルゴスであるとの可能性を支持し続けている[*31]。また、バラウ-ディーゴは、*Bordjia* をめぐる議論に関して、*Bordjia* をボルハとするファニャンの見解を否定すると同時に、ブルゴスとするフェルナンデス・ゴンサレスの見解を否定することなく紹介し、その一方で、ブルゴスの建設年を882年もしくは884年と記すなどの曖昧な姿勢をとっている[*32]。

『バヤーンの書』にある *Burgia* がブルゴスか否かに関する見解の相違は、865年の遠征ルートの特定に関する見解の相違を反映するものであるが、現在では *Burgia* がブルゴスではないとの見解が主流になっていると判断される[*33]。884年以前のブルゴスの存在がこれにより直ちに否定されるわけではないが、史料上の根拠を失ったことは確かである。

史料上の裏付けがない状況下、また中世考古学の観点からの裏付けも得られていない現状では、ブルゴスの地における884年以前の「残滓的集落」の存在を肯定する材料はないと言わざるを得ない。むしろ、882年と883年のカストロヘリスの例に見られるように、最初に入植者が逃げ込むための城塞を丘の上に建設することから始まり、その後、城塞がある丘の裾やそ

の近辺の平地や谷に小さな住区もしくは集落が形成されるという再植民の過程を想定するほうが妥当であると思われる。ブルゴスがカストロヘリスよりイスラム教徒の支配地に近く、イスラム教徒の襲撃に頻繁に晒される可能性が高いことを考慮すると尚のことであろう。

4．ブルゴスの名称について

ブルゴスの語源に関する最初の史料は、13世紀のトレド大司教ロドリゴ・ヒメネス・デ・ラダの記述：「…この国王（アルフォンソ３世）のもと、伯爵ディエゴ・ポルセロスがブルゴスを植民した。ブルゴスは多くの小さな住区 *burgellis* が集まることによって成立していたので、伯は（町が）ブルゴスと称されることを望んだ…」であり[*34]、住区を意味する単語 burg の複数形がブルゴスの名称の語源であることを示唆するものであった。その後、1538年になってドミニコ会士アロンソ・デ・ベネロが『高名なブルゴス市の歴史』において、原初ブルゴス市はアルランソン川の沃野とそれを望む丘の裾野に分散して存在したそれぞれに判事を有する小さな６つの住区を基盤に形成され、それがブルゴスの名の由来となったと述べた[*35]。これ以来、「burg の複数形」説は、例えば、サインス・デ・バランダが1967年に著した『中世におけるブルゴス市とブルゴス市会』において、上記のベネロ説の住区と判事に関する見解を史料的根拠のない推測に過ぎないと批判しながらも、ブルゴスの名称の起源に関するベネロの見解の妥当性を認めたように[*36]、学問的レベルで近年まで無批判に受け入れられてきた。

しかしながら、ゴンサレス・ディエスは、1983年、その著書『ブルゴス市会（884-1369)』において、burg の語義を“住区”とすることに疑問を呈した。なぜなら、カスティーリャにおいて、burg がゲルマン的語義である“住区”の意味をもつと明確に言えるのは11世紀以降のことであり、884年の時点で burg が“住区”の意を有していたことを示す史料は確認できていないからである。一方、burg は、ローマ帝国末期の時点で軍事用語として“櫓”や“城塞”の意味で使用されていたことが確認されており、ゴンサレス・ディエスは、その意味が９世紀末から11世紀初頭のラテン語においても踏襲されたとしたうえで、さらに、『コンポステラ史』の1113年に関する記述を史料的根拠として付加しながら[*37]、ブルゴスの名称は伯爵ディエゴ・ロドリゲスがブルゴス丘陵の地形にしたがって２つの城塞を建設し

たことに由来したとの仮説を述べている[*38]。

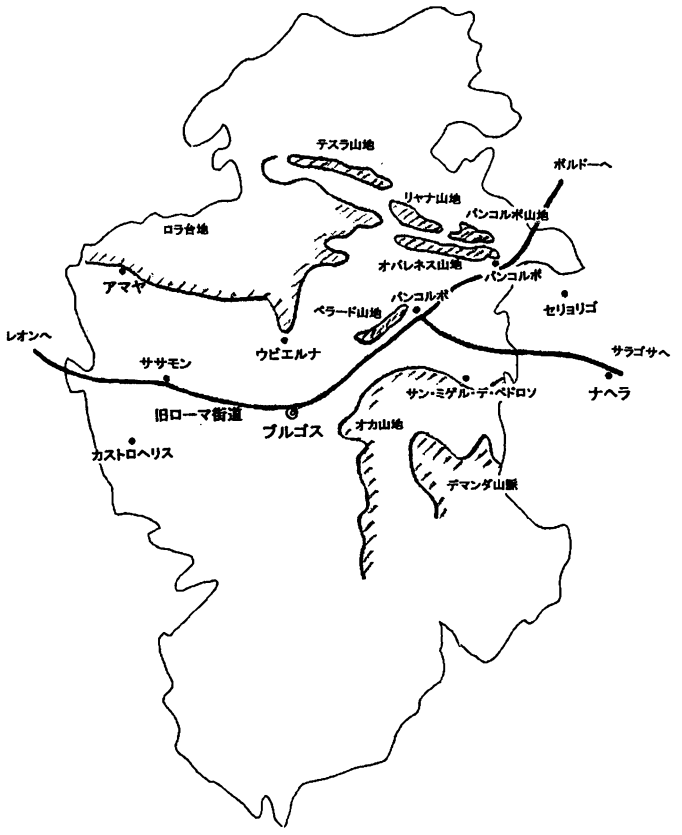
ブルゴスの名称の起源が「burgの複数形」に由来する点は共通であるが、burgの語義が“住区”か“櫓”もしくは“城塞”のいずれであるかの議論は重要である。なぜなら、884年以前のブルゴスの存在に関する議論と無関係ではないからである。すなわち、ブルゴスという名称が史料上最初に確認されるのが899年の『カルデーニャス土地台帳』においてであることを考慮すると[*39]、とくに名称の由来が“住区”であった場合、遅くとも城塞建設後15年以内に複数の住区が存在しなければならず、原初ブルゴスの住区の形成過程を検証することができない現在、城塞建設の以前から複数の住区が存在した可能性を完全には排除できないからである。しかしながら、これはあくまでも“住区”を由来とする仮定に基づく可能性の議論であり、このことが、前章で述べた884年以前にブルゴスが存在した可能性の低さを直ちに否定すると考える必要はない。むしろ、上記の仮定は、その前提として、城塞建設以後の原初ブルゴスの急速な発展を要求するものと考えるべきであろう。いずれにせよ、ブルゴスの名称の起源をめぐる問題の結論を得るためには、原初ブルゴスの住区の形成過程に関する実証的研究の成果を待たねばならないであろう。

まとめとして

本稿は、ブルゴスの「誕生」にまつわる諸問題を、①ブルゴスの建設年、②ブルゴス地域の「無人化」、③884年以前のブルゴスの存在の可能性、④ブルゴスの名称の由来の4つの観点に分け、それぞれについて先行研究に簡潔に言及もしくは紹介するとともに小考を加えたものである。もっとも、上記の4つの観点は互いに深く関連しあっており、それぞれに矛盾しないブルゴスの「誕生」に関する見解が、仮説の段階にあるものも含めて、現時点での通説的な理解として受け入れられるべきものであろう。すなわち、ブルゴス市は、「無人」であったブルゴスの地の丘の上に、884年、アルフォンソ3世の命を受けた伯爵ディエゴ・ロドリゲスによって建設された2つの砦からなる城塞都市として誕生した；ブルゴスの名称はその2つの砦に由来するものであり、後に、それらの砦を囲む形で周辺の平地や谷に小さな住区や集落が成立して行くことになる、というものである。

こうして誕生したブルゴスは、その後まもなく、カスティーリャ伯が拠点とする都市となり、重要な政治、軍事的機能をも果たすことになる。こ

ブルゴス地域の関係都市と山地



れについては、別稿であらためて論じる予定である。

注

*1　「城の国」の意。カスティーリャの名称はこれに由来すると言われている。

*2　ブルゴス市史に関する史料の種類や所在に関しては、*Historia de Burgos*, II, *Edad Media* (1), Burgos, 1986, ps. 23-40を参照されたい。

*3 初代ローマ皇帝となるオクタビアヌスがイベリア半島を平定した紀元前38年を起源とするとされている。したがって、西暦より38年古い。カスティーリャではフアン１世期の1383年まで用いられた。イスパニア歴をローマ数字のまま記したのは、古文書学的誤謬の説明のためである。

*4 *Anales Castellanos I y II*, cit. por http://www.ih.csic.es/departamentos/medieval/fmh/analesI.htm y http://www.ih.csic.es/departamentos/medieval/fmh/analesII.htm （これらの htm はそれぞれ Biblioteca Nacional, mss. V, 4, I, fol. I y mss. 135, fol. IV および Manuel Gómez Moreno (ed.), "Anales castellanos" en *Discurso leído ante la Real Academia de la Historia*, Madrid, 1917に依拠したものである。）

*5 *Cronicón cerratense* en Enrique Flórez (ed.), *España Sagrada*, II, Madrid, 1754, p. 211 cit. por Emiliano González Díez, *El Concejo Burgalés* (884-1369). *Marco Histórico-Institucional*, Burgos, 1983, p.17.

*6 *Cronicón Burgense* en E. Flórez (ed.), *España Sagrada*, XXIII, Madrid, 1767, p. 307; *Anales Compostelanos* en E. Flórez (ed.), *España Sagrada*, XXIII, Madrid, 1767, p. 318; Antonio Ubieto Arteta, *Crónica Najerense*, Valencia, 1966, ps. 67 y 75; cit. por E. González Díez, *El Concejo Burgalés* ..., p. 18.

*7 他の年代記と比較して、『セラート年代記』に見られるトレド征服(1085年) 以前のカスティーリャに関する唯一の記述がブルゴスの再植民に関するものであるということがその理由とされる。E. González Díez, *El Concejo Burgalés* ..., p. 18.

*8 *Ibid.*, p. 18.

*9 882年と883年の遠征については、*Crónica Albeldense*, http://www.ih.csic.es/departamentos/medieval/fmh/albeldensia.htm （この htm は、Real Academia de la Historia (Madrid), Colección Salazar y Castro, O-16, fols. 606r-612r y O-15, fols. 57r-61r; Biblioteca Nacional, mss 712, fols. 467-470 y mss 431, fols. 172v-174 (incompleto); D. W. Lomax, "Una crónica inédita de Silos", *Homenaje a Pérez de Urbel*, I, Silos-Valladolid, 1976, ps. 323-337に依拠したものである） の XV-13 および Lucien Barrau-Dihigo, *Historia política del Reino asturiano* (718-910), Gijón, 1989, ps. 159-165; *Historia de Burgos*, II, ps. 56-58 を参照。

*10 L. Barrau-Dihigo, *Historia política* ..., ps. 162; Historia de Burgos, II, ps.

57-58.

*11 *Historia de Castilla y León*, 2, *Romanización y Germanización de la Mesta Norte*, Valladolid, 1985, p. 101および*Historia de Burgos*, II, p. 56.

*12 ブルゴス地域の地形を考慮すると、ブルゴスとウビエルナの建設は、パンコルボもしくはブリビエスカを通ってレオンへと侵攻するイスラム軍を阻止するための防衛ラインの構築を目的としたものであると考えられる。

*13 Ramón Menéndez Pidal, *Repoblación y tradición en la cuenca del Duero*, Enciclopedia Lingüística Hispánica, vol. I, 1960, p. XXIX-LVII, cit. por Salvador de Moxó, *Repoblación y sociedad en la España cristiana medieval*, Madrid, 1979, ps. 23.

*14 S. de Moxó, *Repoblación y sociedad* ..., ps. 25-26.

*15 Caudio Sánchez-Albornoz, *Despoblación y repoblación del valle del Duero*, Buenos Aires, 1966, ps. 295-299 y 311-315. その他の「無人化」の根拠として、古い方言の消失（形成期の中世カスティーリャ語がカスティーリャ地域からドゥエロ川流域の他の地域に伝播する際の"基層語"の不存在）やイスラム軍の遠征ルート（略奪対象となる村落が不在のドゥエロ川流域を迂回）が挙げられる。

*16 Justo Pérez de Urbel, *Historia del Condado de Castilla*, Madrid, 1969, vol. I, ps. 89-115.

*17 ドゥエロ川以北で、ピスエルガ川からエブロ川東岸域にいたる領域。10世紀にカスティーリャ伯領を構成することになる領域。

*18 "Extrema Durii"と称されたドゥエロ川と中央山系の間の地域。

*19 S. de Moxó, *Repoblación y sociedad* ..., ps. 27-45.

*20 Wilhelm Reinhart, *La tradición visigoda en el nacimiento de Castilla*, vol. I, 1950, ps. 535-554. cit. por S. de Moxó, *Repoblación y sociedad* ..., p. 37.

*21 R. Menéndez Pidal, *Repoblación y tradición* ..., p. XXIX-LVII, cit. por S. de Moxó, *Repoblación y sociedad* ..., ps. 23-24. もっとも、モクソーは、サン・ミゲル・デ・ペドロソに関する史料は、リオハ地方からエブロ川流域における「プロト再植民」の所産であると考えている。S. de Moxó, *Repoblación y sociedad* ..., p. 39.

*22 Jaime Oliver Asín, *En torno a los orígenes de Castilla. Su toponimía en*

relación con los árabes y berébéres, Discurso leído en el acto de su recepción pública en la Real Academia de la Historia, el día 24 de marzo de 1974 cit. por S. de Moxó, *Repoblación y sociedad* ..., p. 39.

*23 ビロベスカとセギサモネは、ヒスパニアとアキタニアを結ぶローマ時代の街道（第34アントニウス街道）沿いの都市であった。両者の間に位置したデオブリグラとトゥリティウムの２つの駅（宿場）の名称は、「無人化」によって忘れ去られたようである。ブルゴス地域のローマ時代の街道に関する詳細については、Isaac Moreno Gallo, *Descripción de la vía romana de Italia a Hispania en las provincias de Burgos y Palencia,* Burgos, 2001を参照されたい。

*24 13世紀末から14世紀初頭のモロッコの歴史家イブン・イザーリーが編纂した歴史書。原題は、*Kitab al-Bayan al-mugrib fi ajbar muluk al Andalus wa-l-Magrib* とされている。

*25 Francisco Fernández González, *Historia de Al-Andalus por Aben-Adhari de Marruecos*, I, Granada, 1860, p. 197, nota (1), en *Textos y Obras Clásicas sobre la presencia del Islam en la Historia de España* (Colección Clásicos Tavera, Serie III, vol. 3, Disco 17).

*26 E. Fagnan, *Histoire de l' Afrique intitulee Al-Bayano' l-Mogrib*, II, p. 161, nota 2 cit. por L. Barrau-Dihigo, *Historia política* ..., p. 171 (nota 48).

*27 J. Pérez de Urbel, *Historia del Condado* ..., I, Madrid, 1945, p. 212.

*28 C. Sánchez Albornoz, "La batalla de la Morcuera", *Anales de Historia Antigua y Medieval*, 1, Buenos Aires, 1948, nota 56 cit. por E. González Díez, *El concejo burgales* ..., p. 24.

*29 E. Lévi-Provençal, "España musulmana hasta la caída del Califato de Córdoba" en *Historia de España dirigida por Ramón Menéndez Pidal*, IV, Madrid, 1957, ps. 206, 211 y 254.

*30 J. Pérez de Urbel, *Historia del Condado* ..., I, Madrid, 1969, ps. 176 y 212.

*31 C. Sánchez Albornoz, *Despoblación y repoblación* ..., p. 159; *Orígenes de la nación española. El reino de Asturias,* III, Oviedo, 1975, ps. 324-325 y 352-358.

*32 L. Barrau-Dihigo, *Historia política* ..., ps. 171 (nota 48), 163 y 180 (nota 123).

*33 遠征ルートの特定に関する議論については、E. González Díez, *El Concejo Burgalés* ..., ps. 24-29を参照されたい。

*34 Ximenius de Rada, *Opera*, Madrid, 1793, cap. XXV, p. 116, cit. por E. González Diez, *El Concejo Burgalés* ..., p. 30.

*35 Alonso Venero, *Historia de la Insigne Ciudad de Burgos* (manuscrita), 1538, cit. por E. González Díez, *El Concejo Burgalés* ..., p. 30, nota 4.

*36 Julian García Sainz de Baranda, *La ciudad de Burgos y su concejo en la Edad Media*, I, Burgos, 1967, ps. 176-177.

*37 その内容は、ブルゴス丘陵には2つの頂部があり、その1つには城が立ち、もうひとつの頂部にはかつて城であったところにユダヤ人が居住しているというもの。E. Flórez (ed), España Sagrada, XX, Madrid, 1765, cap. 85, p. 157, cit. por E. González Díez, *El Concejo Burgalés* …, p. 32.

*38 ブルゴス丘陵には2つの頂（今でも城趾が残る海抜932mの頂と現在ブルゴス城と呼ばれる海抜955mのサン・ミゲルの丘）がある。この議論の詳細については、*ibid.*, ps. 30-32を参照されたい。

*39 "...et comite Gundisalbo Fernandiz in Vurgos..." L. Serrano, *Becerro Gótico de Cardeña*, Solos-Valladolid, 1910, doc. CII, p. 117 cit. por E. Gonzalez Díez, *El Concejo Burgalés* ..., p. 30.